比　恵　31

―― 比恵遺跡群第67次調査の概要 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第770集

2003

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し、中国大陸・朝鮮半島とはいわば対岸にある福岡市には、先史時代以来の大陸・半島の影響を受けた文化財が数多く残されています。福岡市の市街地の南部に位置する比恵遺跡群も、そうした文化財のひとつで、弥生時代以来古代にいたるまで、福岡平野の主要な集落の位置を保った遺跡です。

一方、福岡市は、九州の拠点的な都市として発展を続け、近年は再開発の時期を迎えています。こうした中で、これまで駐車場として空き地のまま利用されていた博多区博多駅南６丁目地内において共同住宅の建設が計画されました。本報告書は、これにかかわって実施した比恵遺跡群第67次調査の成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様の埋蔵文化財保護に対するご理解と認識を深める一助となり、また学術研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　　生田　征生

例　　言

1．本書は、共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が実施した福岡市博多区博多駅南６丁目81に関する発掘調査の成果を報告するものである。
2．本書の編集・執筆は、大庭康時が行った。
3．本書に使用した遺構実測図は、大庭康時・大庭智子が作成し、大庭康時が浄書した。なお、遺構実測図及び文中で使用する方位は、磁北である。
4．本書に使用した遺物実測図作成、及びその浄書には、井上涼子があたった。
5．本書に使用した遺構写真は、大庭康時が撮影した。
6．本書に関わる記録類ならびに遺物の整理には、上塘貴代子・萩尾朱美・森寿恵があたった。
7．本調査に関わるすべての記録類、ならびに遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理、公開される予定である。

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたる経過

平成10年（1998）12月17日、八尋弘文氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区博多駅南６丁目81に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。

申請地は、福岡市教育委員会が比恵遺跡群として周知している範囲の南端付近にあたり、埋蔵文化財の存在が予想された。そこで、埋蔵文化財課では、平成11年１月12日に試掘調査を実施、遺構の存在を確認した。

この結果を受けた埋蔵文化財課では、開発行為にあたっては、発掘調査の実施が不可避であると判断し、協議に入った。協議は諸般の事情から長びいたが、平成11年４月２日には発掘調査にむけての最終打ち合わせが持たれ、４月12日より表土掘削に着手した。

調査着手時の現況は駐車場であったが、発掘調査の事前協議で舗装アスファルトの廃棄が考慮されておらず、産業廃棄物処理をめぐって再度協議が整わず、１日にして調査は中断をよぎなくされた。ようやく５月12日より作業再開となったが、開発者側が用意するとしたトラックが来ず再び中断、さらに２日延びて５月14日にアスファルト搬出、翌15日に表土掘削が終了し、発掘調査作業に取りかかったのは、当初の予定から一ヶ月以上も遅れこんだ５月17日であった。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	㈱ドミックスコーポレーション		八尋弘文
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊（調査）
			生田征生（整理）
調査総括	福岡市教育委員会埋蔵文化財課	課長	柳田純孝（調査）
			山崎純男（整理）
	同	第２係長	山口譲治（調査）
			田中寿夫（整理）
調査庶務	同	第１係	谷口真由美（調査）
			御手洗清（整理）
調査担当	同	第２係	大庭康時

調査作業　井口正愛　大庭智子　永隈和代　長田嘉造　沼田昌信　野口ミヨ　吉田　清　吉田昌敏

遺跡調査番号	９９０７		遺跡略号	ＨＩＥ－67	
調査地地番	博多区博多駅南６丁目81		分布地図番号	東光寺37	
開発面積	377㎡	調査対象面積	221㎡	調査実施面積	200㎡
調査期間	1999年４月12日～６月14日				

3．調査地点の立地

第67次調査地点は、比恵遺跡群が立地する中位段丘の南端付近に位置する。比恵遺跡群のすぐ南には、那珂遺跡群が隣接するが、両者の間には浅い谷地形が認められるとされ、これを持って両者を分かっている。

本調査地点のすぐ南では、那珂遺跡群第29次調査が行われている。柱穴・土坑・井戸などの生活遺構が検出されている。

本調査地点の西側の比恵遺跡群第46次調査地点では、弥生時代の井戸･土坑・溝が調査されたが、遺存状態は悪かった。

さらに那珂遺跡群第49次調査での成果などを考え合わせると、比恵遺跡群と那珂遺跡群が一連になる可能性も少なくない。

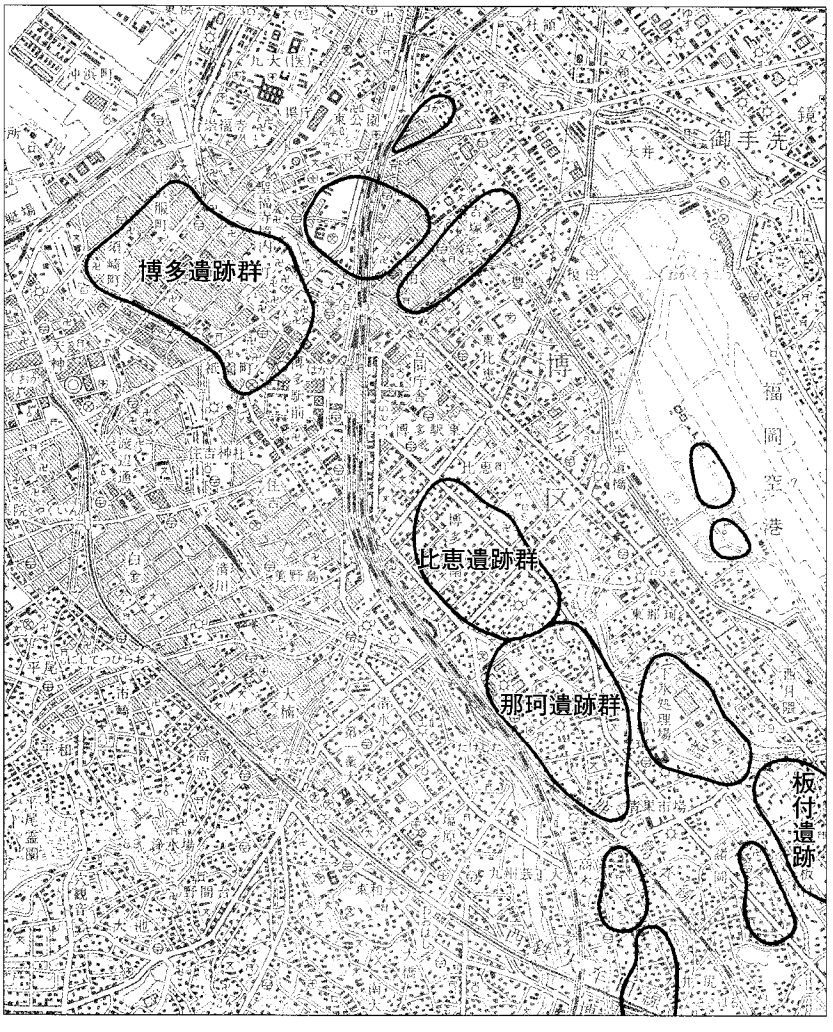


Fig. 1　比恵遺跡周辺遺跡分布地図（1/50,000）

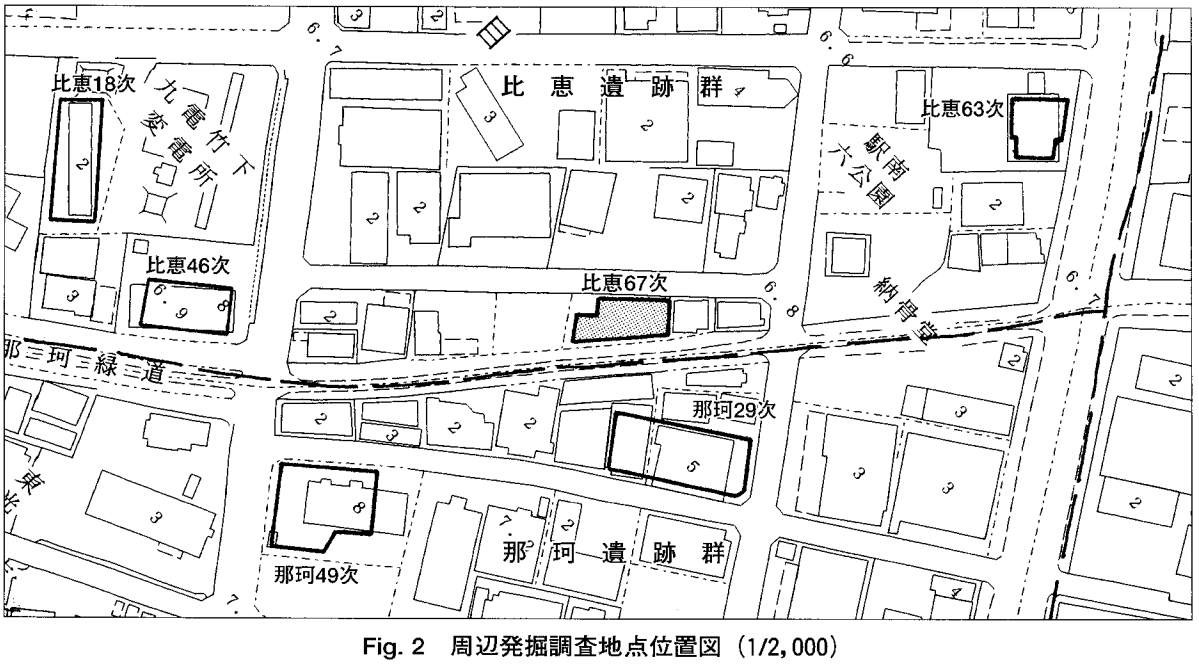


Fig. 2　周辺発掘調査地点位置図（1/2,000）

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法

本調査地点のほぼ中央には、既存建物による大規模な撹乱が存在し、調査対象地は東西に二分された。また、試掘調査の結果では、西側は東側に比べて削平が激しく、遺構の遺存状態が悪いことが予想された。発掘調査にあたっては、遺構検出面が深い西側を調査、ついで東側を調査することにした。

残土処理に関しては、アスファルト舗装の産業廃棄物については仲介した設計業者の手によって搬出、以下についてはバラスと土壌に分け、調査区内に山積みし、うって返しした。

遺構実測に際しては、前面道路に平行して主軸を決め任意の座標を設けて、実測を行った。遺構平面図は20分の１で、調査区周辺測量は任意座標からの座標値を測量し、福岡市文化財分布地図にはめ込んで作図した。

2．基本層序

削平が少ない東側の層序は、鳥栖ローム層を基盤とし、その上に遺物を包含する黒褐色粘土層が堆積する。この層序は、おおむね比恵遺跡群に共通するものである。

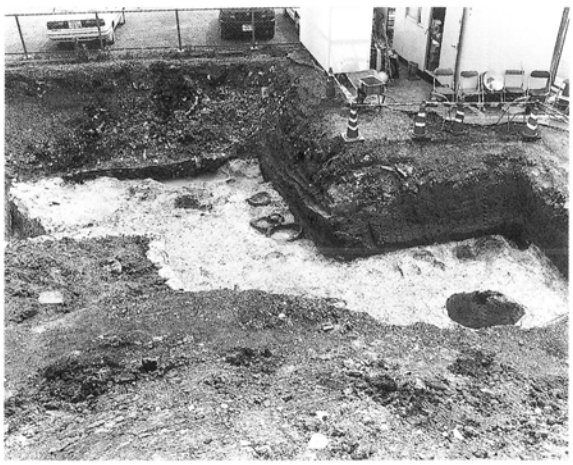
西側では、削平のため、鳥栖ローム層の下位に見られる八女粘土層を基盤とする。その直上には、遺物を包含する暗茶褐色粘土層が堆積する。標高5.9m付近から上位は、盛り土層である。

3. 発掘調査の概要

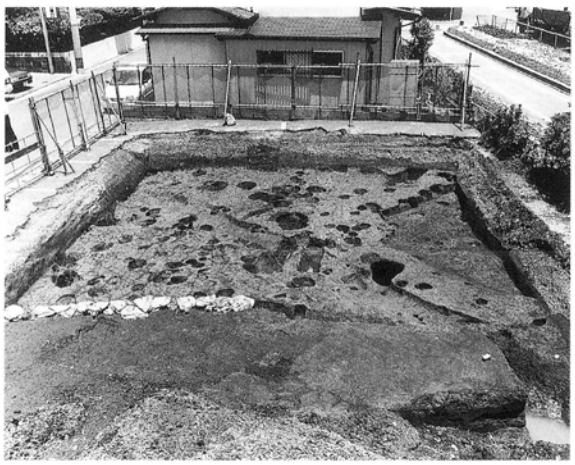
西側の調査区を１区、東側を２区とする。

１区では、井戸･溝･土坑・柱穴を検出した。削平が著しかった為、遺構の遺存状況が悪く、柱穴などは散見される程度であった。１区西端では、不整形の土坑が重なり合っていた。

２区では、竪穴住居跡・溝･柱穴を検出した。竪穴住居は、きわめて浅くしか残っておらず、削平の程度をうかがわせる。柱穴からは、掘立柱建物１棟が推定できた。



Ph. 1　１区全景（北東より）



Ph. 2　２区全景（南西より）

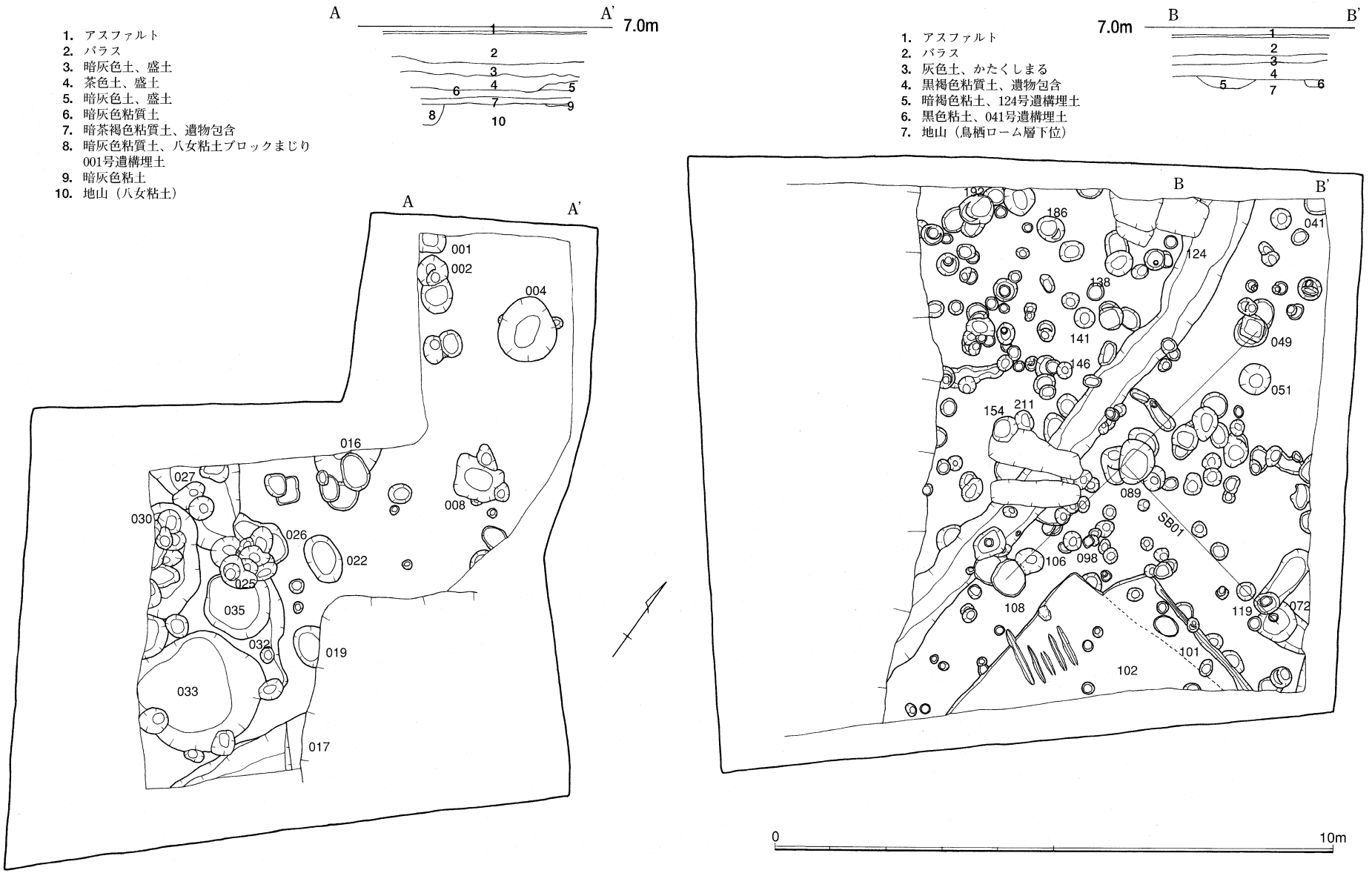


Fig. 3　遺構全体図（1/100）

4．遺構と遺物

(1)　弥生時代の遺構

土坑･柱穴を検出し、２区の柱穴から掘立柱建物跡１棟を推定した。

A．土坑

033号遺構

１区西壁近くで検出した、大型の土坑である。径210cmの不整円形を呈し、遺構検出面から最深部までで40cmをはかる。廃棄土坑であろう。

出土遺物を**Fig. 5－１～３**に示す。**１**は、ひさご形土器である。体部上位のくびれ部分の破片で、突帯が巡る。外面は、丹塗りとなる。**２**は、甕の底部である。外面は、刷毛目調整する。**３**は、大型甕の胴部である。断面コ字型の突帯が、幅広に付く。甕棺の破片であろう。

154号遺構

２区の中ほどやや西寄りで検出した、小土坑である。直径24cm、深さ34.5cmのほぼ円形を呈する。柱穴状の形状だが、埋土内には土器片が詰まっており、柱が立つ余地は見受けられなかった。また、柱抜き跡に土器を詰めたと言う堆積状態でもなく、もともと柱を立てたものではないと判断した。

出土遺物のうち、主要なものを**Fig. 5－４～12**に図示した。**４**・**６**は、ひさご形土器である。**４**は口縁部で、鋤先状を呈する。上面から外面にかけて、丹塗りが残る。口縁外径で、20.4cmをはかる。**６**は、胴部上位のくびれ部分である。突帯が、巡る。外面は、丹塗りである。**５**は、壷の口縁部である。鋤先状を呈する口縁部の上面には、放射状の暗文が、薄く認められる。外面から口縁部の内面にかけて、丹塗りが残っている。口径32.8cm。**７～９**は、甕の口縁である。いずれも、逆Ｌ字形に外折する。器表の磨耗、剥落が激しく、調整痕跡はほとんど残っていない。**10～12**は、底部である。いずれも、平底に作る。**10**は、外面を刷毛目調整、内面には指頭圧痕とナデ調整が見られる。**11**は、磨耗が激しい。**12**の外面は磨耗、内面には底部側からなで上げた痕跡が見られる。

中期後半に属する土坑と考えられる。

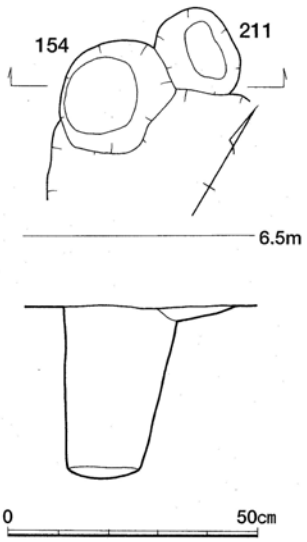


Fig. 4　154号遺構実測図（1/15）

B．柱穴

049号遺構

２区北寄りで検出した柱穴である。径60cm前後、深さ60cmで、二段掘りを呈する。下段は、一辺40cm前後の方形を呈する。

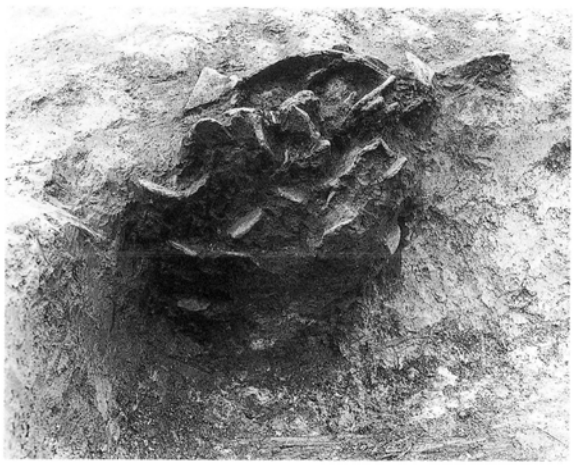
Fig. 5－13は、壷の底部である。平底で、内底には指押さえの凹凸が残る。

１号掘立柱建物跡を構成する柱穴である。

108号遺構

２区南寄りで検出した柱穴である。直径60cmの円形を呈し、深さ72cmをはかる。

Fig. 5－14は、甕の口縁部である。逆Ｌ字形に



Ph. 3　154号遺構（南東より）

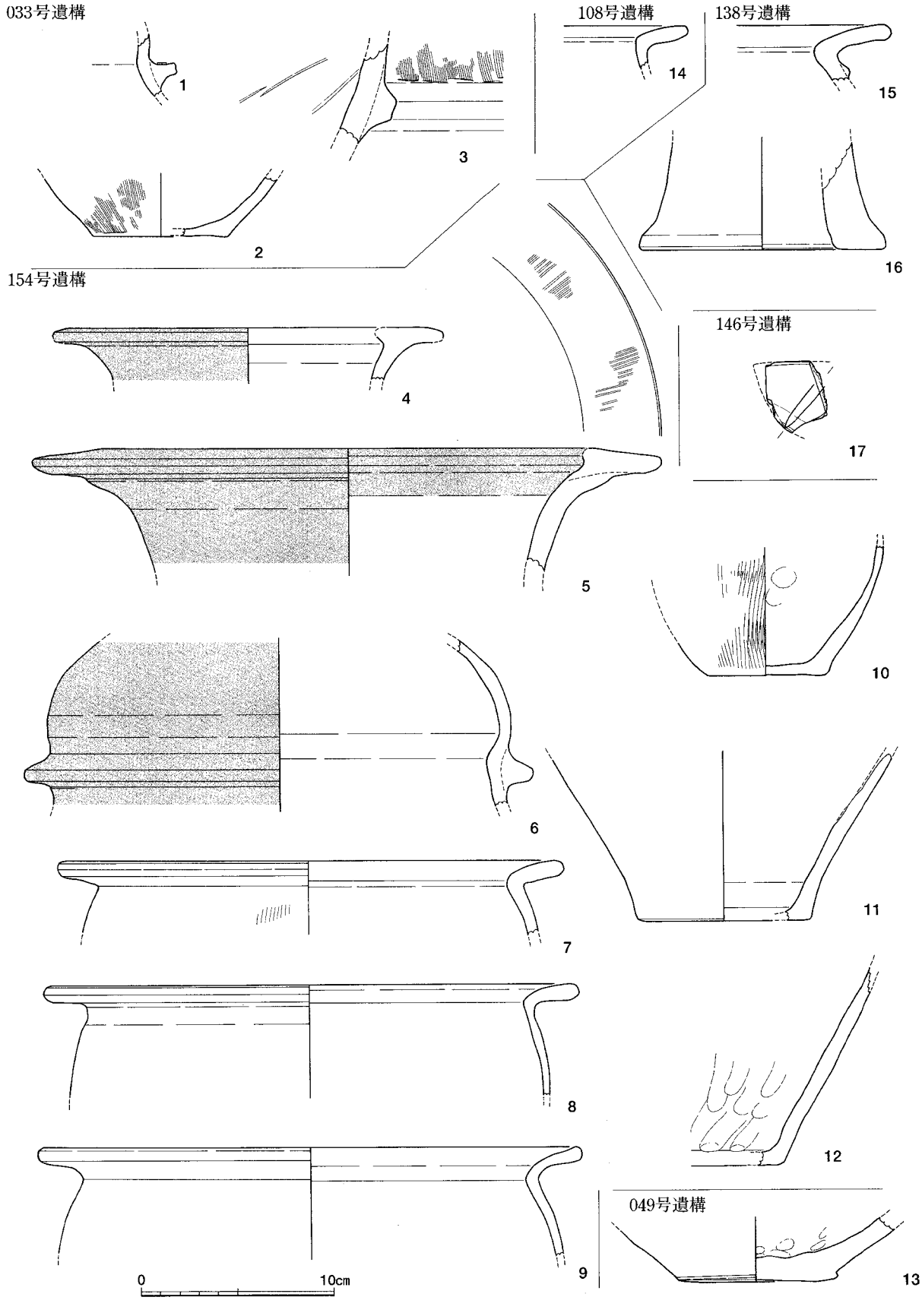


Fig. 5　弥生時代の遺物実測図（1/3）

外折する。

1号掘立柱建物跡を構成する柱穴である。

138号遺構

2区の北寄りで検出した柱穴である。径50cm、深さ47cmをはかる。

Fig. 5—15は甕である。横なで調整される。**16**は、器台の脚部である。器表は磨耗している。

146号遺構

2区の中ほどより検出した柱穴である。径28cm、深さ6cmをはかる。

Fig. 5—17は、**石包丁**の破片である。凝灰岩製。この他、弥生土器小片が出土している。

C．掘立柱建物跡

1号掘立柱建物（SB01）

2区の東側で推定した掘立柱建物である。主軸方位は、北から9度東に振れ、南北に二間分、東西に一間分を確認している。東側の柱穴（072号遺構）の底には、径18cm深さ8cmほどの浅い窪みが見られる。

それぞれから弥生土器片が出土しており、弥生時代中期に属する建物跡と考えられる。

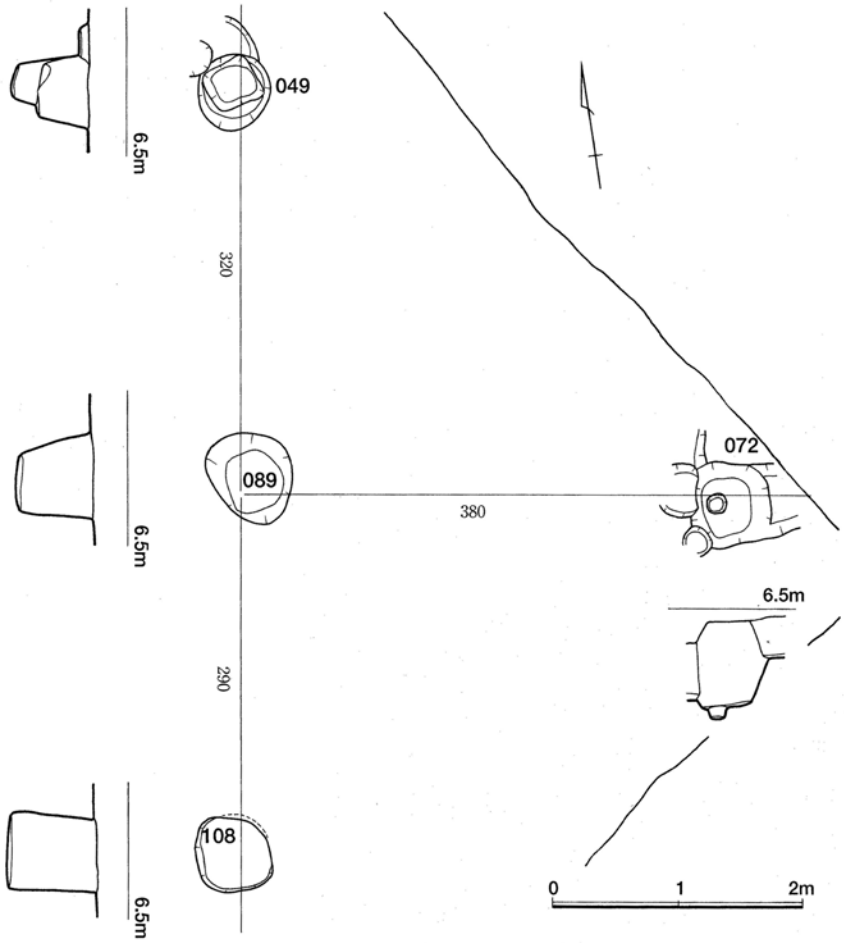


Fig. 6　SB01実測図（1/60）

(2) 古墳時代の遺構

A．土坑

026号遺構

1区西側で検出した土坑である。長軸115cm、短軸70cmの扁桃形を呈する。深さは40cm。

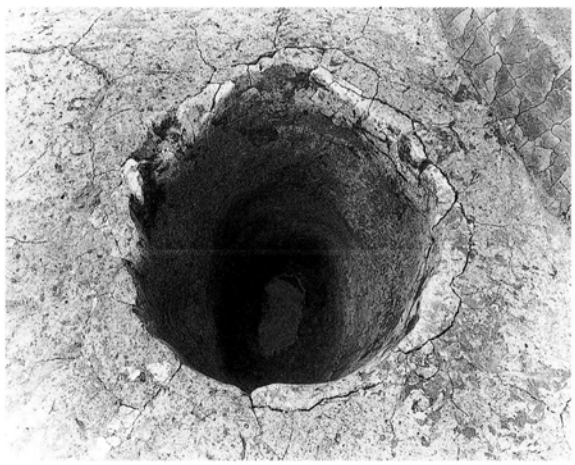
Fig. 8—5は、**土師器**の壺である。内面は磨耗、外面は剥落し、調整痕が残らない。

出土遺物から、5世紀後半と思われる。

027号遺構

1区西側の北辺で検出した土坑である。大半が調査区外に出るが、楕円形を呈したものと思われる。長軸で200cm以上、深さ40cmをはかる。

Fig. 8—4は、**土師器**の器台である。器面は磨



Ph. 4　004号遺構（南東より）

耗している。

4世紀前半であろう。

030号遺構

1区西辺にかかって検出した土坑である。長軸210cmの小判形を呈し、深さは30cmをはかる。

Fig. 8－6 は、**須恵器**の坏蓋である。天井部と体部との境界は、なだらかに屈曲する。**7** は、**土師器**の椀である。器面は、ほとんど剥落している。

6世紀前半に属する。

032号遺構

1区西側で検出した土坑である。部分的な段落ち状に確認したにとどまる。深さ7cm。

Fig. 8－8 は、**須恵器**の坏蓋である。天井部から、小さな段を有して体部となる。

6世紀前半に属する。

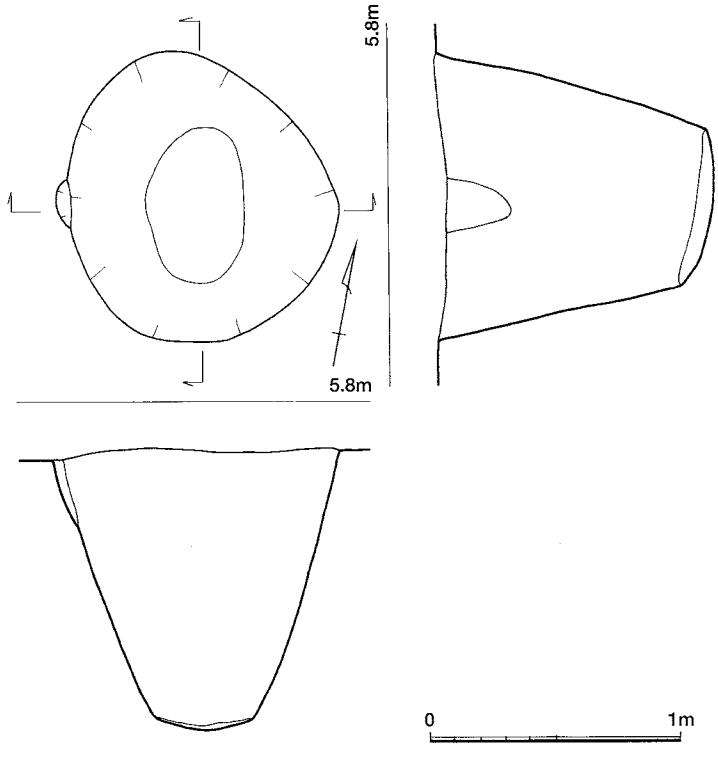


Fig. 7　004号遺構実測図（1/30）

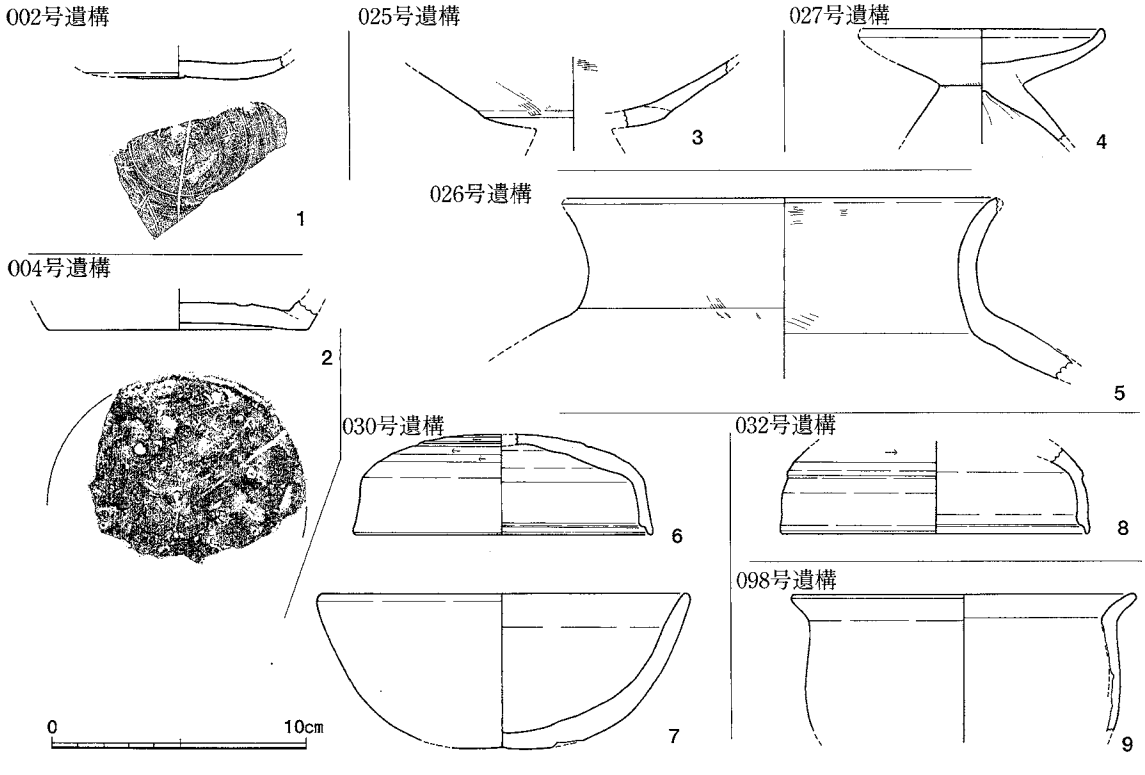


Fig. 8　古墳時代の遺物実測図（1/3）

B．井戸

004号遺構

1区北端付近で検出した、素掘りの井戸である。長軸170cm、短軸108cmの卵形を呈し、深さは112cm。

図示できた遺物は、**Fig. 8－2**の**須恵器**壺の底部のみである。この他、6世紀前半頃の須恵器坏身の小片が出土している。

C．柱穴

002号遺構

1区北端付近で検出した柱穴である。径55～60cm、深さ30cmをはかる。

Fig. 8－1は、**須恵器**の坏身である。底部は、広く平坦にヘラ削りされ、ヘラ記号がつく。

6世紀前半代に属するものと思われる。

(3) 古代の遺構

A．溝

124号遺構

2区をほぼ南北方向に縦断する溝である。調査区北端付近で、緩く西に屈曲する。溝の幅は、65～90cm、深さ15～20cmをはかる。堆積土からは、水が流れた形跡は認められない。

出土遺物の図化に耐えたものを**Fig. 10－7～10**に示す。**7～9**は、**須恵器**である。**7・8**は坏蓋で、**8**の口縁内側には小さな返りがめぐる。**9**は、瓶の頸部であろう。櫛書きの波状文が施される。**10**は、**土師器**の器台である。脚の外面は、削りで面取りされる。

7世紀半ばから後半に位置付けられよう。

Ph. 5　124号遺構（北より）

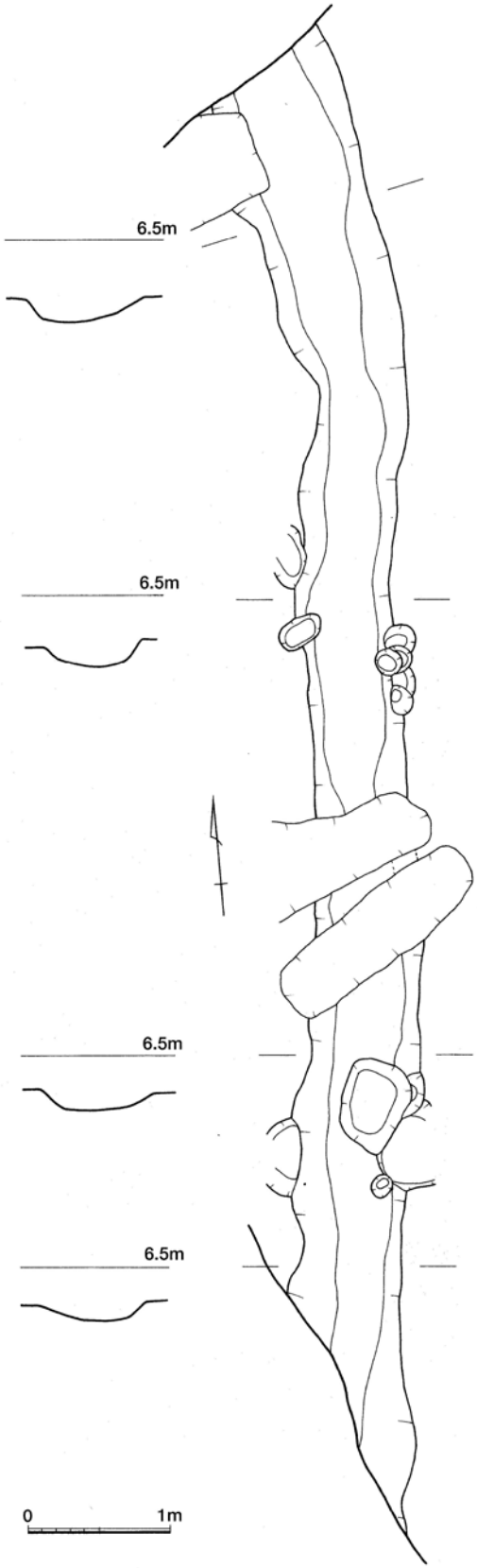


Fig. 9　124号遺構実測図（1/50）

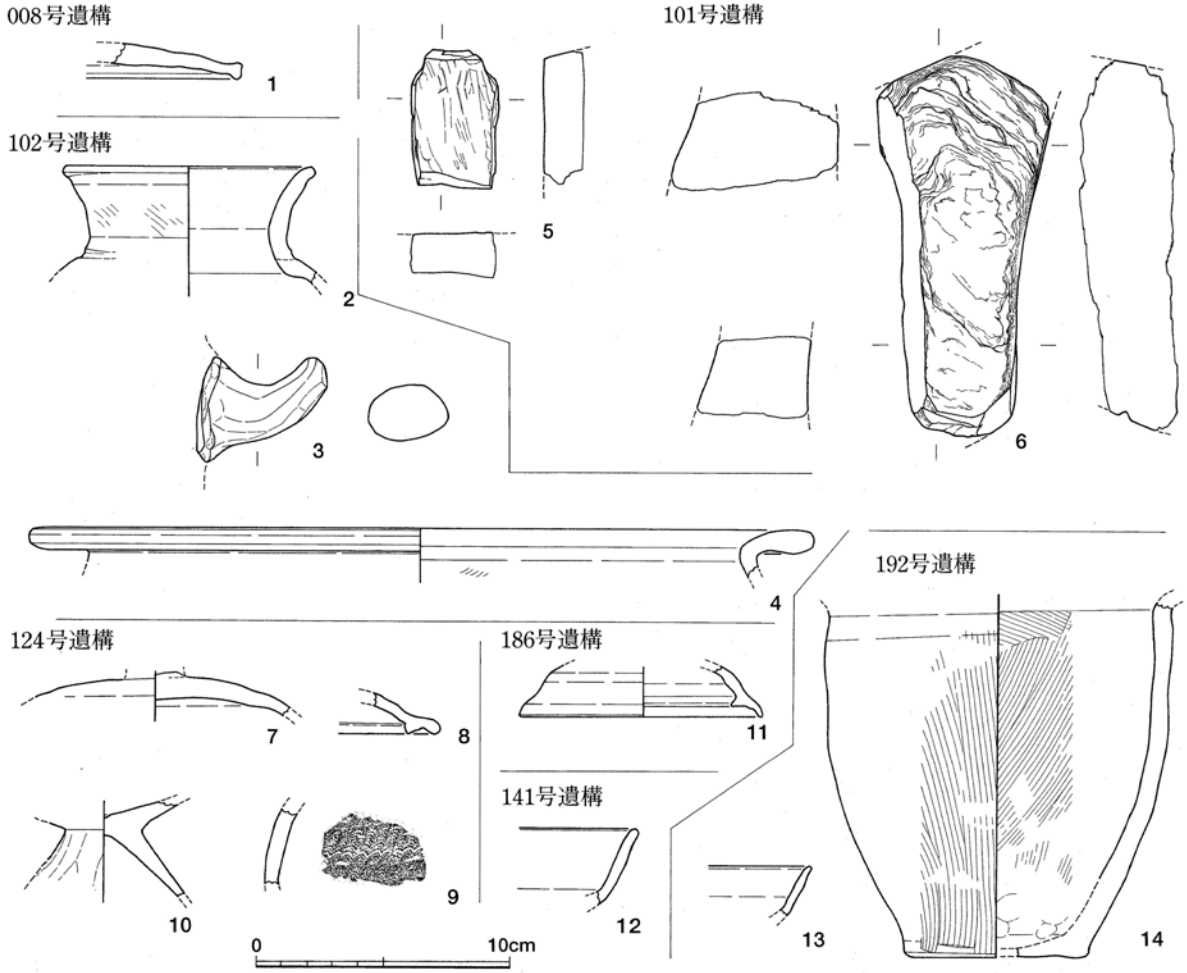


Fig. 10　古代の遺物実測図（1/3）

B．土坑

008号遺構

1区中ほど東寄りで検出した土坑である。長辺90cm、短辺70cmの略長方形を呈し、深さは40cm前後を測る。

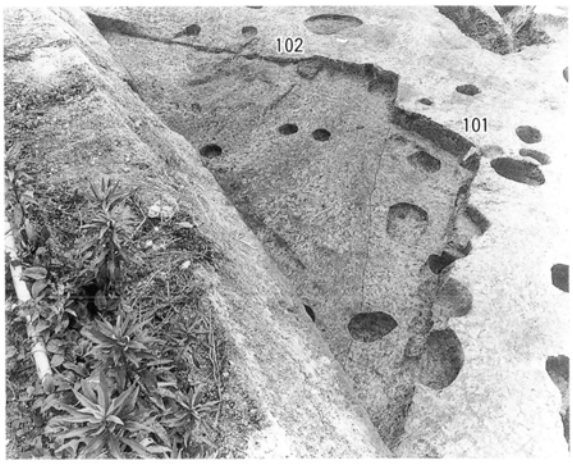
Fig. 10－1は、**須恵器**の坏蓋である。口縁端部を、小さく下方に折り曲げる。この他、土師器の小片が出土しており、8世紀後半の土坑と考えられる。

C．竪穴住居跡

101号遺構

2区南辺から検出したもので、102号遺構に切られ、北辺と西辺の一部を調査したにとどまる。北辺で、深さ20cm分が残っていたに過ぎない。また、北辺に沿って、幅8～20cm、深さ2～5cmの壁溝が掘られている。

出土遺物としては、土師器片・須恵器片などが見られるが、**Fig. 10－5・6**に**砥石**を図示するにとどまった。**5**は仕上砥で四面、**6**は荒砥で両側面を使う。**6**は住居跡の北西角壁面から出土した。



Ph. 6　101号・102号遺構（北東より）

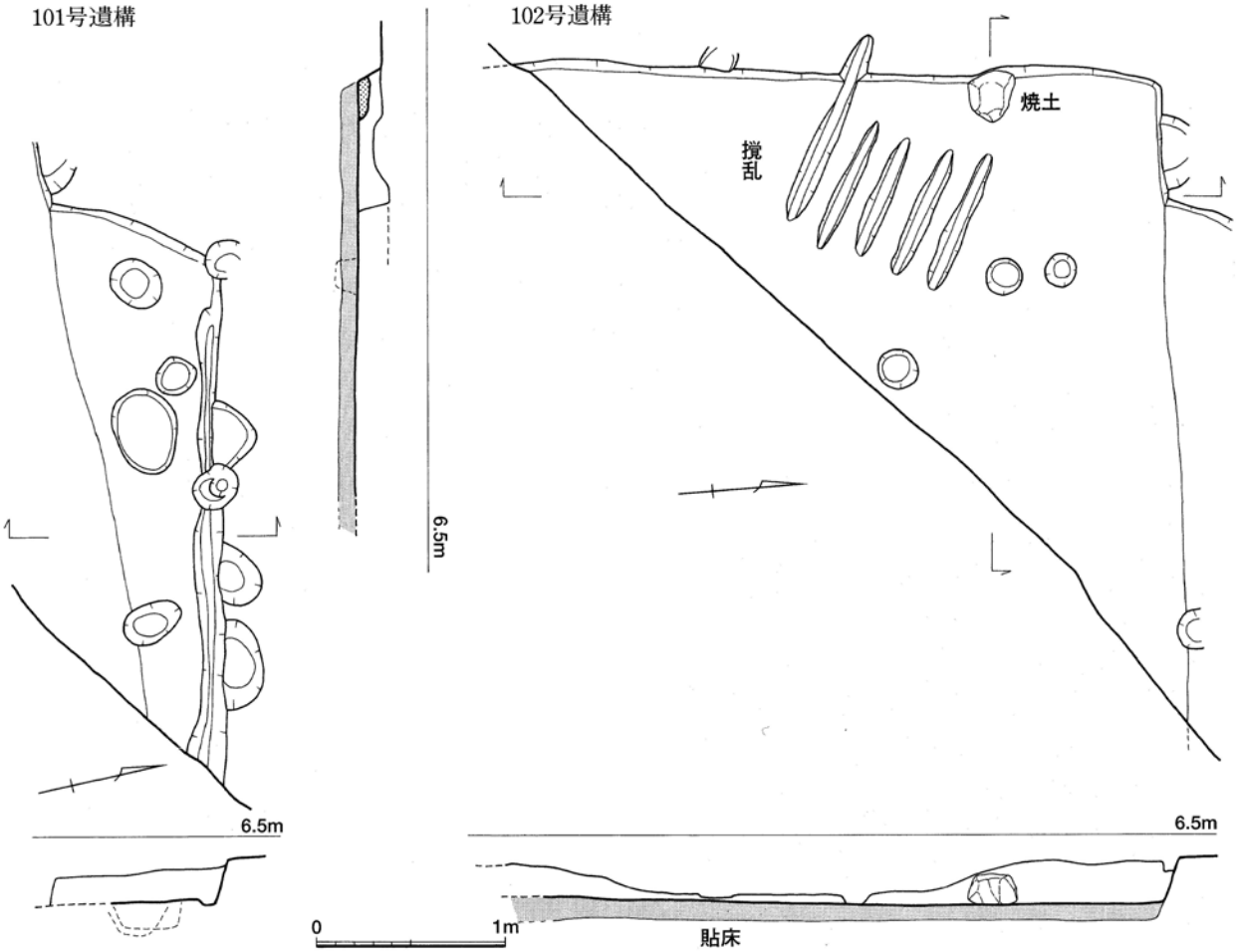
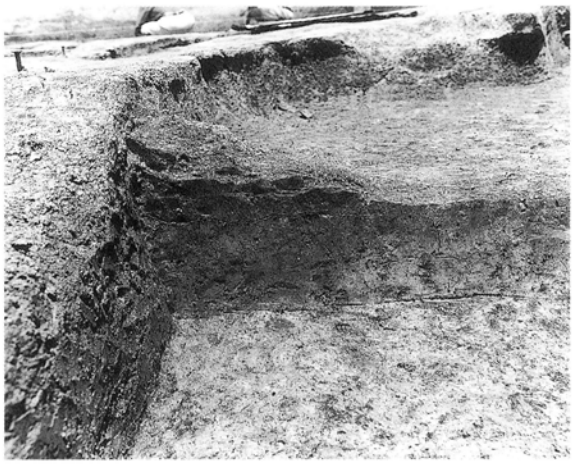


Fig. 11　101号・102号遺構実測図（1/40）

Ph. 7　101号遺構砥石出土状況（南東より）



Ph. 8　102号遺構焼土・貼床断面（南より）

102号遺構

2区南辺から検出したもので、北辺と西辺の一部を調査した。床面までの深さは25cm程度、床面には10cm程度の厚さで粘土を貼っている。また、西辺の一部には、焼土のブロックが見られた。

Fig. 10－2・3は、**土師器**である。**2**は壺で、頸部外面には、薄く刷毛目が残る。**3**は、甑の把っ手である。**4**は弥生時代中期の甕片で、混入品であろう。

D．柱穴

141号遺構

２区の中ほどで検出した柱穴で、径30cm、深さ16cmをはかる。

Fig. 10－12は、**須恵器**の高台坏の身である。８世紀代に置かれよう。

186号遺構

２区の北辺寄りで検出した柱穴である。径50cm、深さ30cmで、二段掘り状を呈する。

Fig. 10－11は、**須恵器**の坏蓋である。復元径9.6cmの小型品で、７世紀中頃に当てることができる。

192号遺構

２区北辺の西隅あたりで検出した柱穴である。径60cm、深さ62cmをはかる。

Fig. 10－13は、**須恵器**の坏身である。**14**は、**土師器**の甕で、内外面を刷毛目調整する。内底部は指押さえする。７世紀後半から８世紀代に位置付けられよう。

(4) 中世の遺構

A．溝

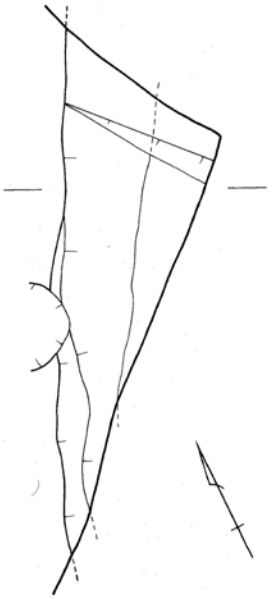
017号遺構

１区南角付近で検出した溝状遺構である。深さ60cm、逆台形を呈し、主軸方位は北から25度東に振れている。

Fig. 12－１は、**中国竜泉窯系青磁**の鎬蓮弁文碗である。このほか、土師器の小片が出土している。

13世紀代に置かれる。

Ph. 9　017号遺構（北より）



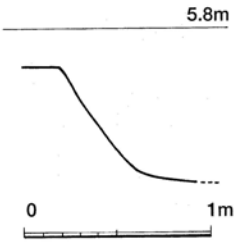


Fig. 12　017号遺構実測図 (1/40)

B．柱穴

211号遺構

２区中ほどで検出した柱穴で、前述した154号遺構を切る。長軸40cm、短軸30cmの楕円形で、深さ22cm前後を測る。

Fig. 12－２～４は、**土師器**である。底部は回転糸切りする。**２・３**は皿で、それぞれ口径8.4・9.6cm、器高1.1・1.2cmである。**４**は坏で、口径12.4cm、器高1.9cm。**５**は、**竜泉窯系青磁**の小鉢である。口縁端部は、水平に切る。**６**は、**青白磁**の合子蓋である。全体で八角形を呈する。内面は無釉、口縁外面と端面は削り取って露胎とする。

鎬蓮弁文青磁碗の小片も出土しており、おおむね13世紀後半頃に位置付けられよう。

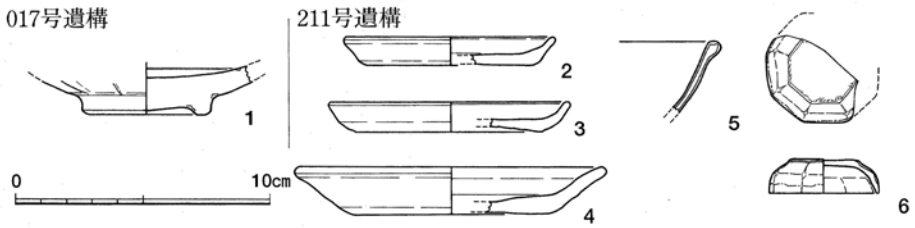


Fig. 13　中世の遺物実測図（1/3）

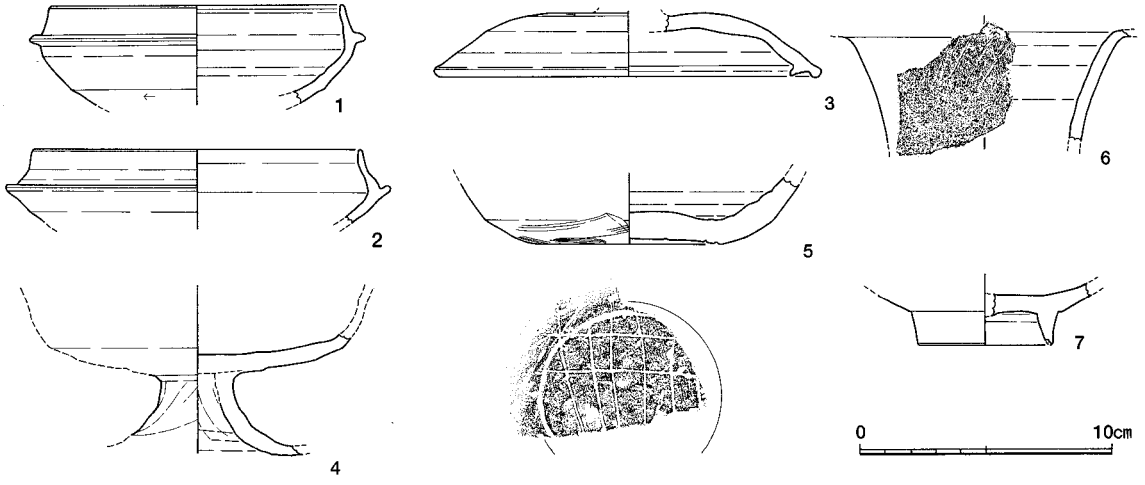


Fig. 14　その他の出土遺物実測図（1/3）

(5) その他の出土遺物

包含層出土遺物をFig. 14に図示する。1～6は、**須恵器**である。1・2は坏身で、6世紀中頃から後半に位置付けられる。3は坏蓋である。7世紀後半に置かれよう。4は、高坏である。体部の腰が張り、脚は低い。7世紀前半～中頃の遺物であろう。5は平瓶の底部である。外底部は、削り調整の上にヘラ記号を刻む。6は、長頸壺の頸部であろう。外面に櫛描き波状文が廻る。

7は、中国の**白磁碗**である。高台は、筒状に高く立ちあがる。12世紀代に属する。

このほか、弥生土器・土師器・須恵器など多く出土しているが、ほとんどが小片で、図示に耐えなかった。

第三章　まとめ

比恵遺跡群第67次調査では、弥生時代から中世に及ぶ遺構を検出した。

弥生時代では、土坑、掘立柱建物跡など、竪穴住居跡こそ確認できなかったものの、集落にかかわる生活遺構を調査したものといえる。

古墳時代では、井戸・土坑・柱穴を検出した。井戸は、円筒形の素掘りであったが、出土遺物が少なく、厳密に所属時期を検討するにはいたらなかった。

古代の遺構としては、竪穴住居跡、溝、土坑、柱穴などを調査した。竪穴住居跡の遺存状況は悪く、大規模な削平を受けたものと推測できる。溝は、調査区を南北に縦断するもので、区画溝としての機能を負ったものと考えられる。

中世では、溝・柱穴を検出した。いずれも13世紀頃のもので、10世紀～12世紀、14世紀以降に、遺構の空白期があることがうかがわれる。

さて、本調査地点は、比恵遺跡群としては南のはずれぎりぎりに当っていた。しかし、検出された遺構は、密度こそ低いもののいずれの時代も集落の一部であった事を物語っている。第一章の「立地」の項でも触れたように、近接地の発掘調査においても、必ずしも比恵遺跡群や那珂遺跡群の周縁的な様相は見られない。遺跡範囲の再検討や失われた景観の復元的研究は、両遺跡群にとって、今後の重要な検討課題の一つといえるであろう。

比　恵　31

－比恵遺跡群第67次調査の概要－

2003年（平成15年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　㈱富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６－45

比恵31 －比恵遺跡群第67次調査の概要－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第770集 2003 福岡市教育委員会